



新古今和歌集抄

上

伊地知文庫
文庫20
311
4



あつたもあつたとあつたもあつたもあつた

武湯のねに二本をね人いふ中さつてんもさつてん
なつたもあつたもあつたもあつたもあつた

たまに國の重いのふんねるさつてんや我のさつてん

法中幸清

あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた

大綱之忠良

あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた

あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた

有家

あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた

八条前太政大臣

あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた
あつたもあつたもあつたもあつたもあつた

限もあつらひしるまのこころの音乃らうらんち

野寺訪僧歸常月やのてらをうらふ僧かへりしつねつきそくへりかるといふにんくみもの

なつらるゑと云河也なつらるゑと云河也なつらるゑと云河也なつらるゑと云河也なつらるゑと云河也なつらるゑと云河也

心なり

花のそとをてのらうりしるまのこころの音乃らうらんち

こころなり。心なり。本音

心なり。本音

本音をさるゑも。月よすむらして出あはれしと云河也

本音をさるゑも。月よすむらして出あはれしと云河也

秀能

○月とあつらひしるまのこころの音乃らうらんち

宵の程は月を雲を月よりさるゑのらうらんち

を雲もさるゑの音志はしるまのこころの音乃らうらんち

のちと云河也。心なり。本音

心也。然野へ氣流の時の音乃らうらんち

西

○月とあつらひしるまのこころの音乃らうらんち

月をさるゑの音志はしるまのこころの音乃らうらんち

を雲もさるゑの音志はしるまのこころの音乃らうらんち

のちと云河也。心なり。本音

心也。然野へ氣流の時の音乃らうらんち

心也。然野へ氣流の時の音乃らうらんち

慈園

在中汲心よんもいしよみるのまじきと身のたごひもく
あくるそらなほまじき^{まじき}のまじりともなりそらなるみみ
富士の糖よ^かいしよとさうらる也。又心もくも世の人
抽^{ひき}るさうらるなり

西り

同よみひく富士のまじりさよ清いしきもさぬと魚のま
西位^{さいざい}不定のまじり富士のまじりのほよみひく^{まじり}なり
まじり格との流あねも右用共作女の一身のまじり

慈因

○むかして品志の戸はうそ心のはくもんりなり

うのまへ人たむよ心あり入りなり。又世といふ
人又まへ人なり。まじりもあまは戸をまじりてま
まじり。その心乃たくもんりのまじりなり

藤原家勳弼臣

いひてもむいしよくまじりなり。のたくの杜乃かま
むまじりいしよのたくの杜乃かま。杜のゆわねまじり
乃まじり思ひくいしよ音也。杜のたま音のまじりま
まじり。あまは富よまじり格ひし。まじりなり。一
まじり。あまのまじりなり。まじりなり。まじりなり

通具

一まじりまじりなり。まじりなり。まじりなり。まじりなり

本言 位徳ぬいさうらるる心はまはるる本なる心とてさうらるる
けをさうらるる言の心は推考の心とてさうらるる天子の心とてさうらるる
新威と新なる心とてさうらるる也

る家

我らるる松を物とてさうらるる神をさうらるる松を松とてさうらるる
ほくさうらるる心にて松をさうらるる心とてさうらるる時毎の心とて
松を松とてさうらるる神の心とてさうらるる松を松とてさうらるる
とてさうらるる心とてさうらるる松を松とてさうらるる

殿富門院太輔

うらるる松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
本言 うらるる松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる

日 我らるる松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
いぬさうらるる心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
とてさうらるる心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
とてさうらるる心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる

定家

○松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
後白河院松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
の松とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
本言 さうらるる松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
本言 ハ松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる
又さうらるる松の心とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる松を松とてさうらるる

皇月約信徳國よりするなり。その外は國よりする
約院。宮をくめ信下あるよりする也。事分
使中納言の友する人つしむる也

光皇院入道藤原白太政大臣

佐保川のかねひきききなねしうとせよあひてふいある哉
菰氏の流ひきききき川の川よよとてしんまふい
ゆると友位なるのみみきききききききききききき

人丸

しものあやうら川のあるもいよあみのゆるきききき
氏よ八十氏あり。或のやうらといききききこの國よれ
あるものつた家の住と名を行み家をあうら

ふや島ありはよ流のしものからやとよ流也。れ
向後しんくなくゆる心なり。ていひいひいひい
よなりいよいよいよいよいよいよいよいよいよい
かききき

中納言の平

○よる世をいよあやうらとていよあ海の流といつれちしん
はあは村ありてあまあまあまあまあまあまあま
とていよ流とていよ流とていよ流とていよ流とていよ流
不越場の心也。あああああああああああああああ
のしんまき成るよあひい心なり。我世とあまあま
只もあああああああああああああああああああ

越のそと久しく海に傳ふるよそ人のそと
傳ふる熊野のつらつらける河書也そと熊
あしをり。あし川よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを
かたれつらと人よとむしは海道のゆを

家隆

いほつれ若の建はあもくまぬ山海の日を
熊野の夕乃落り来いほつれ山海の日を
いつらんそとむし。西のそとむし。南のそとむし。
ともあつそとむし。

小侍

○樗つじの後の夜よあわもつらわつと海の日
南のそとむし。西のそとむし。南のそとむし。
よ入らむそとむし。林よとむし。海よとむし。
あつれむ。神の海よあつれむ。神のあつれむ。
あつれむ。あつれむ。神のあつれむ。あつれむ。
あつれむ。あつれむ。神のあつれむ。あつれむ。

格致殿

○これの人よとむし。あつれむ。あつれむ。
あつれむ。あつれむ。あつれむ。あつれむ。
あつれむ。あつれむ。あつれむ。あつれむ。
あつれむ。あつれむ。あつれむ。あつれむ。
あつれむ。あつれむ。あつれむ。あつれむ。

舟のうらよしの物さね流の下まのいふまゝのまゝ
とくまのいふまゝの舟なりがまゝのまゝのまゝのまゝ
いふまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

増賀上人

らまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
いふまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
つものまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

东三隆院 善家之女

○このまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
后いひまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

後いひつりまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
まゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
お家いひまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
也いひつりまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
也いひ昔のまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
しいひつり衣裏いひ寶珠いひとまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

冷泉院大皇太后宮

○はまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
つまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
东三隆院后いひまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ
ともろくまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

都も河原の八きくらねくらよらの水はすまよかきん
少ねき光横川よらわけてがしほねらうしほまかきつるせ
路ひくつりきる河也第一のうらも。東田の白八橋り
くらもやせ都も横川はほりくる人とねらうしや
かきんやうかきん

や

如きん

○百敷の内らほねらよらして東の八きくらよらとみら
控身の人のきよきつらねらよらひく思ふと本まこり
あきくらやらふきよねらも物まかきんかきん也
をねらもらほねらよらとみら九きんとみら
くら常よらひくよらひく思ふと本まこり

夫よのきよきつらねらよらして東の八きくらよらとみら
んねらよらひくよらひく思ふと本まこり

憶ふ親王

○夢のよみほねらよらとみらひく思ふと本まこり
をねらよらひくよらひく思ふと本まこり
の雷のよみほねらよらとみらひく思ふと本まこり
よらとみらひく思ふと本まこり
なみほねらよらとみらひく思ふと本まこり
うらえらとみらひく思ふと本まこり

飯原清正

あきらむるも世のうらみもあきらむるもあきらむるも

○ふたのくはいてふのわいさうあつてつてふのふを
前大信正慈回もみせつて思ふ程のふを
昔田村の軍陸奥の塚といふ所は石日本中央也や
石の碑文をくさくさ呼ぶるもよと云也。あつてつて
くくもよ思ふもよと云くくもよと云

白雲院

ふはつてつて思ふもよと云くくもよと云
何と云と云思ふもよと云くくもよと云
そよんぱいもよと云也。伊はもよと云くくもよと云
河也。我もよと云くくもよと云くくもよと云

後成

うきふくくくく世はつてつて思ふもよと云くくもよと云
何と云と云思ふもよと云くくもよと云
くくもよと云くくもよと云くくもよと云
くくもよと云くくもよと云くくもよと云

家隆

○ふはつてつて思ふもよと云くくもよと云
くくもよと云くくもよと云くくもよと云
くくもよと云くくもよと云くくもよと云
くくもよと云くくもよと云くくもよと云

小野小町

○ふるさとの風よとまらして人なれどうきこめての月さくらんふ
とみちてふたごのれとよのちうんかふさうんかふさうんかへてし
ゆりうさうさうのんとはちうさうさうさう也。木枯れぬあふと
ゆきとんしうらふらう人なれどとらちのさうんかよふゆ
らと心のうらふとをれとあふ也

後成

○嵐のねのぬきおし日のもきてとろく成ゆわなまふさうれ
源氏あふいの春よ。雲は吹風よつとまふに。木枯れぬあふと
さうさう海はまふとさうとあふとせほとさうあり。さうの心は
さうのとみちの口まうて嵐よとろく成ゆわなまふさうれ

うきさうのさうらて落さうわさうり

山宗徳院御書

字とねハ枯れぬと木枯れぬとさうとさうと後成うさうしつ時おふ
あがと後成はさうさうのみちなまふ

空回

竹はさめ風吹よらふゆわねのさうあふねハ枯れぬさう
竹のさうさうとさうけハ枯れぬさうさうさうさう海とさう
えてあふねあふさうなり

西

○さうたれぬ入おの種の名と世あふとあふさうさうさう
ま又字かあふと入おのさうさう。さうのさうと云也。世よ

世のそらよりわがまをわまりのひまよりひらきかたり
又況よほよりしてのせがねむよよ後世をあらまき
とあり

西り

○せほひよりあをたはまふらむあまをたぬかた思ふよん
さぞとほふらむら河世ぬ又そのこころ世をあらま
あまはほふよひよりあまをたぬかた思ふよん
あま思ふよんをたぬかた思ふよん

同

○あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん

うきあまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん

同

あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん

同

○あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん
あまのこころ思ふよんをたぬかた思ふよん

後頼朝

入道前園白太政大臣

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document from the late Heian period.

後頼朝

Handwritten text in cursive style, continuing the document or letter.

源師光

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document from the late Heian period.

源師光

Handwritten text in cursive style, likely a letter or document from the late Heian period.

源師光

源師光

いさくものさうまなうら

神祇奇

○おやまのこねやうしもかきうさのゆあわのこわおやまん
うらうらこしら社壇の梅はあらうらうらこねはうらうら
ある木の名也ゆき名のこらこらをあらうらうら成り
社乃破壊を流しへしこねはへる世音よなむ中傳る
恒吉の清音也と古流あり
我ら乃び人いさうまらうらうらてい文音よゆきのあうらうら
かきあらぬ音也音もゆきうらうらんと本音ようら
結らむしといふ音なり

玉依姫

三統理平

とらまらあまの若ねるうら木はゆきうら八宮もくねる
天の岩舟八天うらうらうら鳥の名也さねはたね翔と云也

攝政殿

神風やみもさう川のうらうらあらうらうらとねは急をあらうら
太神文と書り大の神と君臣のね整りを讀み也

太上天皇

○あうらうら神らの山は神消くゆあへのさよせん月うら
迷の雲消く神消の夕よまわりて心月神あうらうらよ
あうらうらやと也神流山の山音よ似合うら神流山太神
宮の山也神消てと八ねの力ゆと母上迷國の山消

國志 齋 燈 成へてすを。天照太神へ行りて世を治
まらるるなり

同

○神代やまをくくはまのくまをくくけてあまといふもか
神代ハ伊勢のうらりてまも也。凡のいほくを毛隔ぬこく
神代のあまねき事と神代とよあり。豊八代也。あまの
なると云は也。まも神もまも神物玉也。まも神の
あまのまも。清浄の物なるべし。かこつと。かこつと。怒
まもまも也。幣帛六へいのも也。五色のまも。五色の幣也
西り

○山を根する岩根りまもくくてあまをくくぬ日乃以
下津岩根らる三代以みげ下界へ降臨ありて。神代
の深固なる事也。宮根ハ宮代乃事なり。中臣
後下津岩根り宮根太まもあり。廣太まも神也。あ
まをくくぬ日乃以。今の世にてお光のまもあま
なり

慈園

やまをくくはまのくまをくくけてあまといふもか。乃月
太神文の以威也。まもまもまも。乃月まもまも
乃月まもまも。乃月まもまも

中院入道右大臣

まもまもまも。乃月まもまも。乃月まもまも。乃月まもまも

鴨長明

○石川もまた人の石川のまゝまわす月もみわするなるうとを
 上かをそまじ。なまはら書。下くをそハ鴨とるもり。石川やとらん
 の小川とて河。あはれ神櫻とる。石川とて天河の別名也。
 石川河とて瀬はあまらり。つららなる神はあり。石川
 天河をねし月をみわするなるうとを。出づるはな
 結セクならり。つら。び川のそら也。

後成

まらおのそららの道のむらねあはれ。神のそらら。あまら
 らのそらら。棘路とる。そららの唐名也。そらら。我牙の
 下友や。そらら。あまらねぬ。そららの下のね水とる。

あまらと。そららのそらら。あまらねぬ。そららの下のね水とる。

慈園

○目吉の法よ。あまらねぬ。そららの下のね水とる。
 らら。ほくけい。書流也。本のまら。木堂の如来也。目吉のそらら
 らら。本地。兼師。あまらねぬ。そららの下のね水とる。
 らら。兼師。あまらねぬ。そららの下のね水とる。
 らら。兼師。あまらねぬ。そららの下のね水とる。

同

まらおのそららの道のむらねあはれ。神のそらら。あまら
 らのそらら。棘路とる。そららの唐名也。そらら。我牙の
 下友や。そらら。あまらねぬ。そららの下のね水とる。

ちりちり人のもくはたききりきりなるなりこの
みりよるもふく程ほどとせしむるも。神かみをわたゆる也

同

○ちりちり人のちりちりぬ。海あやしき昨日よりあ
日吉の柳かたのちりちりす。象ぞう生迷まよ言ことちりちり
利り生せい方便ほうべんなるも。心こころのちりちりちりちり
みこあやしききのちりちりちりちり。昨日ちり
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

同

ちりちり人のちりちりちりちりちりちりちりちり
福ふくいいちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

白川院法衣

○ちりちり花のちりちりちりちりちりちりちりちり
さきよりのちりちりちりちりちりちりちりちりちり
の大おほ意い大おほ想そうよ。ちりちりちりちりちりちりちりちり
態たい野のへへちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
してせあり

左京太史顯捕

ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり
かちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり

新二巻目

五十一

他の善法をいふめく忍辱の禮甲をいふてぞ
 去りたるありと云ふ乃て以て経をといふと
 了らるる。他の所をいふていふ所は
 其も後立をいふて違ふ所をいふと云ふ
 らるる也。これをいふて余は何もおぼ
 せらるる。法をいふて其のまじりたる
 田をいふ也。

五月にわき林院の善法をいふて
 此後

此の所の林をいふては法はあつた
 所をいふ林院をいふは法はあつた
 所のむと云ふ

慈園

此の所の林をいふては法はあつた
 所のむと云ふ。法をいふて其のまじり
 たる。田をいふ也。五月にわき林院の
 善法をいふて。此後

曰

○このみりたる所の白露。いふは
 是ハ所也。此の所の林をいふては法は
 あつた所のむと云ふ。法をいふて其の
 まじりたる。田をいふ也。五月にわき
 林院の善法をいふて。此後

花落葉をうんで世中のひまゝなるをこそ縁也。ハ
独りこそ世をさへりし心をもよめり。声や縁の二道に
の色小宗也。空は縁する人也。十界ハ地獄 餓鬼 畜生
修羅 人界 天界 声聞 縁覚 菩薩 佛界 是十界也
心強のさるるをよめる

小侍位

○色母を海し心のやうに流るるは乃ち作ら
色即是空の文の句面をこそまといひるるなるべし
橋政大政大臣家百首言ふ十樂の心をよる人作する
小宗宗来迎樂

寐蓮

○は急の雲流よこそ小娘今乃ちまふこそ世をさへりし心は乃ち松風
極系よ流るるよ小宗宗来迎樂よこそなるべし
心よのれりしをこそ流るるこそよるの言ともよる。心は
のさへ松風よこそなるる色のなれどこそ世をさへりし心
よねの雲風をこそ流るるをこそよる。標土苦域の界は
よるの心よこそなる也

蓮華初開樂

同

あわやのうき世のあはれもあはれん花のさるる乃ちわのりなる
下あつ生のほせ人蓮花来迎し極系八功位地
十二大功をよる。花をよるをこそ流るるをこそよる
浮世のわのりよこそなるるをよる

○もろの意打るぬかまをぬかむ世をぬかの世の世も
 ぬかの文の心末世よけ法花経をとりしよ。まろの悪人
 行る人。まろを刀杖瓦石をけりて。けし師を
 けりて。けしのぬかむ。けしの世のまろをけりて。けし
 いみぢり。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けし
 けし文也。意打。雨よ。まろをぬかむ。けしの世のまろの
 まろをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。

五百弟子品内秘菩薩行の心を

慈圖

○もろの意打るぬかまの意打るぬかまの意打るぬかまの
 富樓那尊者よけの意打るぬかまの意打るぬかまの

佛て。ぬかむ。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 いまの意打るぬかまの意打るぬかまの意打るぬかまの意打るぬかまの
 經と説き。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 一也法花経よけ。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 大乘圖妙の月。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。

二乘但空 智如螢火 寂蓮

○もろの意打るぬかまの意打るぬかまの意打るぬかまの
 けし文の經と説き。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 けし也。二乘ハゆえ小乘也。法花ハ空とけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 是を法と云也。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。
 常と志。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。けしをけりて。

菩薩清涼月

遊於畢竟空

同

雪々ねらひしやうさうさな位なる浮世の中をさるる月さ
び文の心なき蓮の悟を晴るる月よとて人ふれしやう
交りあふる世生の業穢せしやうとて幸甚とて

梅檀香風 悦可衆心 同

○皆凡よるあつたやめりさしけしけりやうさうさの座の那
是は法花經を説法んとて六の瑞雲のありしやうとて
瑞とてまゐるの人天竜畜了とて何をとてさうな
るねも 舞は悦の心ありしとて此を瑞雲と云也けし

ねいゆるは昔はあふ心らさる世候のさるるさう

他是教已復至他国 同

○やんあつたものかてし契きてあささるる法のなげと
是は法花壽量品の文也心の醫者のつらがあつた
の子を扱ふるるさうも 親の心ぬるる毒菓をさ
ひく痛は 却るるを 親地なり油をさるるんて 破菓
を 潤きして みよも 母の毒氣をさるる入るるさう
乃をさるるさうも 毒菓をさるるものさう也 時親菓
を 子よあつてさるる身ハ他国へ行ってさるる乃をさるる候
つらさるる ぬるるハ ぬるるさうも ぬるるさうも ぬるるさ
しるるのわら菓をのみさるる病いゆ也 ぬるる供のさるる

ほろろて悟る人なれば毒の毒気あたま也佛の
流るるを信じて入城の後悔するも遅くは
とて悟るは悔の毒気あたま入る程く覺
み世心と致すもやまきこふことんはく
悔のやまきこふも他國へ行く心也法の
けいた他國へは役をつらして死する心は法の
みよのやまきこふ心なり

此日已過 命即衰滅 曰

○まじくもあたまもまじくも入おの程乃し
歎の文何の程もまじくも文の自面をあら
かりもあたまのまじくもまじくもあたま

入おのうのまじくもまじくも

悲鳴 啞咽 痛癢本群 素覺法師

まじくもあたまのまじくもまじくもあたまの
まじくもあたまのまじくもまじくもあたまの

弄思入喜る

寂然法師

○うげとついで世のゆくりあはて思ふ人もあ
けぬか家なる何の文也世をまじくもあたま
悟るはまじくもあたまのまじくもあたまの
世の人まじくもあたまのまじくもあたまの
かり弄思入或又或母妻子かまじくもあたま
まじくもあたまのまじくもあたまのまじくもあたま

二人より山海をさうして自由よき一の心とて

不邪淫戒

此の戒はもろくもさうのとて夜ついであふ事あるべからず

不沽酒戒

花のそと香のさけハ程もあへぬふもさうさき酒のさけ
酒のさけは酒をさきまをさか入てさう酒をさか
さうさき酒をさか入てさう酒をさか入てさう酒をさか

如是報

二條院深波

うきこもれし人の心とたもさうさき酒のさけ
法華經方便品第十卷にさうさき酒のさけあり
毛むすひのあきさうさき酒のさけあり
待賢門院中納言人さうさき酒のさけあり
さうさき酒のさけあり

後成

さうさき酒のさけあり
唐太皇太后人さうさき酒のさけあり
美福門院極楽六時儀の法よりさうさき酒のさけあり
今うき入日をさうさき酒のさけあり

あつてと。西方の釈心しやくしんのつとよりなり
 人のつとよりなる後法ごほふ流りゆう陀だ供く養やうくもす。即すなはち淨安じゆあん
 樂世界らくせかいのつとよりなる

瞻西上人

昔むかしの月のひらをまゝ人よてこころいや君きみのけしんけしん
 詠よめハ法華經ほふわきやう第五ごの文也。若有はたやう女人にょにん聞き此こゝ經きやう即すなはち淨安じゆあん
 東世界とうせかいとあり。けしんけしん月の光ひかりとほけしんをまゝ
 るつとよりなるなり
 觀心くわんしんをよまん侍まへをよ

西行法師

○三番さんぱんわく心のつとよりなる月のひらのつとよりなるなり

やまをれえ。けしんけしんしやくしんのやまをれえ也。東ひがしハ法華經ほふわきやう南みなみハ終しゆうり
 門かど西にしハ法華經ほふわきやう門かど也なりがんとハさとハ也なり也なり
 妙たみのつとよりなるなり

新古今集注終

以抄出連之清先卷之說少之又加了
有書置一冊也不可他見之故筆法
其正龍者也

平常緣 在判

右一冊以東野別自義本之書寫之可
證本者也

文明二年三月日 宗章 在判

此集之抄出以右之與書本書寫之尤可
謂秘錄而奇既不幾首漏脫多之

仍年來所抄之義亦今加之 在常錄也
心朱加九巨

分而為上下段似有之恐所記此處之

之例素是以惠雲院殿 迫衛
太閣 三光院殿 三
系

西元
內有 小之評說述卑詞者也身以禁外更
源可納函底有

慶長第二季陽下旬 丹山隱士玄肯 在判

